

沖縄・激しい弾圧に屈せず闘う！

副委員長 小林 勝彦

11月15日～17日の3日間、樋口執行委員長と共に、沖縄県名護市の辺野古と東村高江に緊急行動に取り組んだ。

秋年末闘争真っ只中のこの時期に、2泊3日と言う短期間で強行したのには訳がある。安倍自公政権が衆参両院での過半数越えを盾に、自衛隊の南スーダン派遣と駆けつけ警護(=戦闘行為)を正当化して、戦争への道を急ピッチで進めており、沖縄では、基地反対闘争への激しい弾圧が行われていることへの危機感からである。



辺野古は静かだが・・

15日、昼過ぎに辺野古に着き、ボートで大浦湾に出た。工事休止のためフロートもやぐらもない静かな海だった。しかし、地元漁師の警戒船や民間警備会社の巡視船が、威嚇するかのようには停泊していた。

キャンプシュワブのゲート前も静かではあったが、ここにも警備

会社の警備員が、以前と変わりのない姿で立っていた。工事が休止中で、抗議行動もないにもかかわらず、税金だけが無駄使いされていることにも目を向けなければならない。

高江で座り込む！

翌16日の午前8時半ごろ高江に着いた。すでに200名程の人たちが抗議行動を行っていた。私たちが道路脇に駐車し、抗議行動の場所に駆けつける際に見たものは、6台の大阪府警の車両と2台の関東ナンバーの機動隊車両だった。ここでも民間警備会社の警備員を盾に、機動隊が工事ゲートを守っていた。



長期不当拘束されている山城博治平和センター議長に代わり、大城事務局長が指揮する中、私たちは座り込みの最前列に位置取り、砂利運搬ダンプの搬入阻止行動を行った。この日は“水曜行動”と



称して、沖縄全土から島ぐるみ会議のメンバーが多数参加していて、座り込み者は300名を超えていた。このため警察も排除を諦めざるをえず、土砂は搬入されなかった。まさしく、この闘いを非暴力で勝利するには、数の力しかない実感させられた。

新基地建設断固阻止！

イギリスのEU離脱、差別主義者・トランプの勝利と、世界は内向きになっている。こんな情勢下で、日本においても、易々と新基地建設を許してしまえば、安倍政権はいっそう独裁色を強める。差別発言を平気で行う警官とこれを擁護する府知事や閣僚。劣化した官僚やメディアなどと負の連鎖を引き起こし、このままでは日本は奈落の底に転がり落ちかねない。

沖縄の反基地闘争は、日本の民主主義を守り、未来を切り開く闘い。なんとしても勝利を！

「もんじゅ廃炉」はまやかし

執行委員 川村 和美

運動の成果

「もんじゅを廃炉へ！全国集会」が12月3日、福井県敦賀市で行われ、支部から2名が参加した。

今年9月21日に開催された原子力関係閣僚会議において、「高速増殖炉については本年中に抜本的な見直しを行う」とし、高速炉開発会議においても、「もんじゅについては“廃炉”の方向で調整する」となり、政府は「もんじゅ廃炉」の検討に入った。

このような状況下、「もんじゅ」のある白木海岸での集会には全国から600名を超える人たちが集まり、1995年のナトリウム漏れ事故以来、「もんじゅ」の危険性と廃炉を訴え続けた運動が、今まさに実を結ぼうとしている。

しかし集会では、政府は、福井県内で新たな原子炉建設を目論ん

でおり、この計画には全力で反対していこうなどの発言があった。

集会後には、「もんじゅ」までデモを行い、代表団が、日本原子力研究機構に対して、「もんじゅの廃炉を直ちに決断すること」「核燃料サイクル政策の断念」などを申し入れた。

核燃料サイクルは不可能

午後からは、市民ホールにおいて集会が開催された。

福武公子弁護士（高速増殖炉もんじゅ訴訟住民側代理人）から、「もんじゅを安全に運転することは出来ない」と題した講演が行われた。福武弁護士は、もんじゅで使われる冷却剤のナトリウムの危険性や、もんじゅの地震動に対する脆弱（ぜいじゃく）性、核燃料サイクル政策の欺瞞（ぎまん）などについて話された。



続いて、菅直人・元内閣総理大臣が「福島原発事故の真実」について講演した。その中で菅議員は、「もんじゅをはじめ、すべての原発をなくし、太陽光などの自然エネルギーに転換することが必要」と強調された。

「もんじゅ」の廃炉が決定されても反原発運動が終わりになるわけではない。政府は、「もんじゅ」の代わりに新たな「高速炉」の建設を計画していること、福島原発事故の原因究明がなされないまま国内の50基を超える原発を、政府与党や電力会社は再稼働を目論んでいる。国民の生命を軽視する原子力政策を許さず、すべての原発を廃炉にしよう。

